

## 第2回 府立高校特色化推進プラン検討会議（概要）

1 日時 平成24年8月31日（金） 午前10時から正午まで

2 場所 京都平安ホテル 朱雀の間

3 出席者

(1) 委員10名（欠席2名）

(2) 府教育委員会 永野指導部長、石田管理部理事管理課長事務取扱、西村教職員課長、古市指導部理事、藤井高校教育課長、川合保健体育課長ほか

4 概要（主な意見）

(1) 質の高い教育

- ・ 入学段階での生徒の学力について、学校内で相当隔たりが出てきている。入学時から3年生までの個々の生徒の学力の変化をきちんと追跡して分析する中で、それぞれの学校の課題を明らかにしていく必要がある。
- ・ 学力向上と生活改善には、非常に重要で密接な繋がりがある。生活改善なくして学力向上はない。20年以上続いている府立高校実力テストについて、教科数を5教科に戻すとともに、新たに生活実態調査を合わせて実施できないか。調査をもとに、生徒の生活改善に係る共通資料ができるのではないかと思う。  
きちんと食事を摂っているか、早寝早起きの習慣がどの程度定着しているか、家庭学習の時間がどの程度確保されているかなどの調査を実力テストと合わせて行うことで、学力と生活習慣の相関が見えてくる。入学後の1年間は高校生活においては非常に重要であることから、工夫が必要である。
- ・ 生活改善なくしては学力の向上はないという意見に同感である。例えば、返事ができない、あいさつができないということは、就職だけではなく、進学して大学生を送る上でも、重要になってくる。ソーシャルスキルは、若い時期からの積み重ねであり、就職の前に何とかすればいいというものではない。小学校の低学年から身につけさせることが必要であるが、高校はその最後の機会でもある。
- ・ 私立高校では、生徒を塾に通わずに難易度の高い大学への進学を保証することを大きなセールスポイントにしている。公立高校においても学校独自の取組で生徒の学力を総体的に伸ばすことが今後非常に重要になってくる。
- ・ 府立高校実力テストに併せて、生活実態調査を実施することには賛成である。本校でも独自に生活実態調査を行っているが、調査からいろいろなものが見えてくる。調査結果についてはPTAの総会などで返しているが、朝食を摂る率なども微妙に学力に反映している。生活実態調査を府統一で実施することは良いことである。
- ・ 府立高校実力テストについて、理科・社会を加えた5教科としてほしい。また、実力テストの分析として不足している点は、進路指導に使えていないことである。個人別に、2年生の2回目のテストでこの点数を取っていた生徒が、最終的にどの大学に行ったのかといったようなデータがあれば、一層進路指導に活用できるのではないか。個人情報に留意した上で、各高校の追跡調査をしてはどうか。
- ・ 生活状況調査と府立高校実力テストとの相関を分析する際、また、その後の手立

てを検討する際には、発達障害、あるいはその周辺の子どもたちの要因も念頭において進めてほしい。生活習慣が乱れていることが、単に積み重ねだけによるものなのか、ベースが発達障害であるのかということも考慮する必要がある。

- ・ 質の高い教育に関して言えば、ICTの活用が重要と考える。本校では、4年前の校舎全面改築の際に、全普通教室にプロジェクタが設置された。活用策については校内でも検討していたが、昨年度からパナソニック教育財団の特別研究指定を受けることで、ICT教育の環境がさらに整った。
- ・ ICTに関しては、使い始めの第1歩でなかなか腰が上がらない点が課題である。40代後半の教員には、アナログ的な感覚の方が良いという思いもある。現在は、若い教員を中心に教材開発がより進んでいる。また、毎月1回公開授業を続けることで、心理的なハードルが低くなる中で、かなり上達し、活用する教員に広がりが出てきたと思っている。
- ・ ICTは、子どもの視覚に訴えるという点では非常に効果がある。社会や理科でのイメージづくりなどにおいては、臨場感を持って理解できるなど効果も大きい。生徒たちの学びへの動機・興味付けには効果的であるが、学習内容の定着化が課題である。また、一番大切にしたいことは、生徒たち自身が機器を活用してプレゼンテーション力を育成・定着させることである。生徒たちには様々な機械を使うことに違和感はないので、力を伸ばせる部分だと思う。
- ・ ICTによる視覚的な授業は、特別支援教育においても効果的な面がある。例えば、高校では、中学校とは違って、教科書を持ちながら教員が口頭で説明したことを生徒がノートに写すというような授業形式をとられることがあるが、そうした方法は辛いと相談を受けることがある。視覚的要素をうまく授業に利用してもらえると、生徒の理解度や興味・関心が高まるなどの効果がある。また、タブレット型コンピュータも使い方によっては、読み書きが非常に困難な子どもたちの学習効果が上がると言われている。
- ・ ICT活用と学習効果の相関を検証しながら進めてほしい。例えば、プロジェクタやタブレット型コンピュータを活用するにしても、紙ベースのものをそのまま投影したのではあまり効果はない。画面を見て直感的にわかるような教材を図示し、それを中心に学習・授業が進めていくことが、非常に効果的な子どもたちもいるが、逆に、視覚的な認知が混乱をもたらす子どももいるので、配慮が必要である。
- ・ 府立高校で、電子黒板を部分的に導入しているところはあるが、全教室に配置されている学校は極めて少ないのではないかと。大阪のある府立高校では、全教室に電子黒板を配置して、板書の時間が省けるなど、授業のスピードが1.5倍になったと聞く。昨年度在籍した学校では、学力向上フロンティア事業として予算措置をもらい、限られた教室ではあるが電子黒板を配置した。今後、一定の成果が出てくると思う。
- ・ ICTの活用について、板書が苦手な子どもが機器を使うことで、他の子どもと同じ速度で板書ができるようになり、成績が伸びたという事例がある。読み書きを支援することで基礎学力がかなり伸びる。伸び悩んでいる子どもを支援するにあたって効果的である。

- 質の高い教育を進めていくためには、機器・施設の整備、教員の資質向上、さらには工夫した教育を推進するための教員配置が必要である。
- 保護者の立場からすれば、各高校が一人一人を伸ばす教育を進めることによって、予備校や塾に行かずに進学や就職することは大変ありがたいことである。

予備校などから夏季講座等の案内が多数届くが、継続して通わせるとなると、大学の年間授業料よりも高額な費用がかかる。予備校に行くことを否定するものではないが、今の社会状況からすると、予備校に行かせてやりたくても行かせることができない保護者がほとんどではないか。高校においてしっかりと対応してもらえることは大変ありがたいことであり、そうしたことが本当に必要になってきているのではないかと思う。
- 中学校から高校に進学する時に、私立高校に行けばきちんと面倒をみてもらえるが、公立高校はその点が弱いということをよく聞く。生徒一人一人の伸ばし方には違いがある。子どもが順調な時はよいが、何かに躓いた時にどのようにフォローしてもらえるか、という点が保護者としては気になる場所である。

各学校には一定の割合で教員が配置されているが、予備校に近いような進路指導や躓いた子に対する対策ということまで考えた教員の配置はされているのか。教員の配置やタブレット端末の整備、ICTの活用等、全てにおいてお金のかかる話であり、予算がつかなければ何も進まない。必要な予算措置をお願いしたい。

例えば、タブレット端末については、最近の子どもたちは小さい頃からゲームなどに親しんでいるため、説明書がなくても使えると思うので、効果的な授業を進めるためにも、ぜひ、子どもたちに提供をしてもらいたい。
- 教員の配置についても、加配措置がされることで、楽になれる生徒はたくさんいる。また、教員の得意分野を生かして、適材適所に配置することも大切ではないか。
- 「地域を見つめて世界を目指せ」と常に生徒には話している。グローバルな視点を持つ前提としては、地盤となる地域をしっかりと見つめることが大切である。

そういう観点で北部地域のことを考えると、北部医療の問題は深刻である。医師の数は足りているという統計データもあるが、実態としては、若い医師が何年か北部の医療機関に勤務して別の所へ移っていくという繰り返しであり、じっくり腰を据えて永住する医師がいるかということ、そうではない。地域のことを考えれば、府立高校から医学部に生徒を送り出し、医師となって地元に戻ってくるという実績をつくらなくてはいけない。北部の高校に医学部進学コースの設置が必要である。

なお、特別な教育の実施にあたっては、少人数での授業や外部講師による指導などの施策が必要となってくる。現在、本校では、学校設定教科として「みらい学」を開講しているが、生徒たちが個人研究を行うには教員数が足りないのも、様々な大学の先生方のお力をお借りして実施しているところである。一人一人を伸ばし、進路を保障していくためにも、教職員の増員・充実を図ってほしい。
- 本校の分校には、特別な支援を必要とする生徒も在籍している。そうした生徒たちにきめ細やかな指導を行うにあたっては、安全な教育環境を保障するという観点からも、該当生徒を支援する教員が必要である。分校には農業科と家政科があるが、実習を伴うため、危険が生じる場合がある。一人の生徒に対して一人の教員がつかなくてはならないという現実もある。生徒一人一人を伸ばす教育を推進するためには、支援員などの配置が必要である。

- ・ 現在は、40人学級であるが、例えば、医学部進学コースなどを作った時には、実際にはもっと少人数での授業を行う必要がある。少子化の進行や各高校の特色化などを踏まえ、一人一人に手厚く指導するためには、1学級40人という基準そのものを考えていかななくてはいけない時代になっている。
- ・ スクールカウンセラーとして学校現場で保護者の声を聞くことがあるが、現在の教育システムでは、入学時に一度選んだコースが変更できないという学校も多く、入学後に不適応を起こす生徒が生じている。そういう生徒に対して臨機応変に、少人数での指導や個々に応じた教育がどこの学校でもできるようにしてもらいたい。
- ・ 質の高い教育を行うためには、学校の教育力の向上や教育施設の充実なども併せて考えていかななくてはいけない。
- ・ 公立高校としては、入学してきた生徒一人一人を落ちこぼさないことが大切ではないか。中学校時代に成績がふるわなかった生徒が、私立高校に進学後、中学校の復習問題を繰り返し行ってもらったことによって成績が上がった例がある。生徒のレベルに合わせた指導をする余力が今の公立高校にはないのかもしれない。
- ・ 中学校としては、一番頑張ってもらいたいのは少人数指導であるが、40人で教えるよりは30人、20人という中で、一人一人が躓いているところを察知して指導することが重要であると思う。

## (2) 徹底した進路保障

- ・ 家庭の経済力が非常に弱くなってきており、高校まで卒業させるのが精一杯といった家庭も増えている。そうした危機感から、手に職をつけることが切望されている。農業科や工業科などの専門高校もあるが、他にも就職につながるような資格取得ができたり、技術を学べる高校はないかと思っている保護者や子どももいるのでそうした学びの幅を広げてもらいたい。
- ・ 学校教育の目的の一つは、将来的な職業人として自立させることだと思う。学力を高める、協調性を養うということも大切であるが、そのことが目的ではなく、プロセスと捉えることもできる。学力向上や協調性を高めることが目的になってしまって、自立に向けての教育という観点が失われているように思う。
- ・ 子どもは本当に楽しみながら、充実した高校生活を送っているが、残念ながら、規則を守りましょう、人の気持ちを大切にしましょうといった、ソーシャルスキルの指導が抜けているように思う。
- ・ 府立高校生の進路状況をみると、就職した生徒が9.7%、就職も進学もしていない生徒が3.9%で合わせて14.6%もいる。進学していない生徒にとっては、高校教育が最後の学校教育の場である。そうした生徒が自立して生活していくためには、高校教育の中で、ある程度のソーシャルスキルやキャリア教育を充実させていく必要がある。基礎学力の向上については教職員が担い、キャリア教育やソーシャルスキル教育は外部の専門家が担うなど、両輪で進めていくことも大切ではないか。
- ・ 公立高校よりも私立高校の方が丁寧であるという声を聞くとのことだが、特別支援教育に関して言えば、府立高校には、特別支援教育コーディネーターが配置され

ているし、特別支援教育コーディネーターや特別支援教育に関する研修を受けた教員の数は、私立高校よりも公立高校の方が多い。

ただ、特別支援教育コーディネーターが一人で頑張って解決できることは少ないし、スクールカウンセラーが生徒の心のケアをすべてまかなえるわけではない。新たに、キャリアカウンセラーを常設するにしても、横断的・縦断的な組織の中で、特別支援教育コーディネーターやスクールカウンセラー、その他の専門家が一体になって、キャリア教育やソーシャル教育を進めていくことが大切である。

- ・ 医学部を目指せる子どもの中には、勉強はできるけれどソーシャルスキルが著しく劣っているアスペルガー症候群の子どももいるのではないかと思う。こうした人を障害者ではなく「ギフテッド」と呼び、優れた能力を伸ばしていこうという考え方が欧米にはある。しっかりとフォローすることで、学力や専門性をより高められる子どもたちもいる。

大学入試センター試験では、高校時代に支援計画をしっかりと立てている生徒に対して試験配慮が行われている。高校時代の支援を、特別支援コーディネーターが一人で担う、あるいは、学年の先生方が担うのではなく、キャリア教育を担うチームが一丸となることで、生徒への適切な支援が校内で統一していけないのではないか。

- ・ 大学進学を考えて私立高校に行っている生徒は目的意識が高いが、公立高校にぎりぎり進学する生徒の中には、とりあえず高校に行きたい、その先のことは考えていないという生徒も多い。高校に入学してから、今後の生活や進路のことなどをきちんと指導してくれるキャリアカウンセラーの配置などが、府立高校の底力を上げていくことにつながるのではないか。
- ・ 一昔前までは、公立高校は授業料が安いということが高校進学に当たっては一番の要素であったが、私立高校も実質的に授業料無償化となったため、公立高校と私立高校の垣根はほぼ無くなりつつある。私立高校の教員は基本的にずっと固定されていて、公立高校の場合は人事異動があるという違いはあるが、授業料無償化などにより、公立高校も私立高校も同じ土俵に立っていくのだと思う。
- ・ 自分の子どもは公立高校にしか行かせないと言って育ててきたが、今、もしも小・中学生の子どもがいたら、学校の特徴や教育内容、大学の附属高校であるかなど、これまでとは違う観点で、高校を選ぶかもしれない。

例えば、自分の娘が通っていた高校では、京産大、龍谷大が一つの到達点であり、「よく頑張ってくれたな」という思いがしていたのだが、多くの私立高校は大学と連携しており、高校で一定の成績を取れば、大学に行ける環境にある。保護者にとっては非常に魅力的である。今までは行って欲しいと思わなかった、あるいは、行かせることができなかった私立高校に、頑張っ行って行かせようかという保護者が増えてくるのではないか。

普通の府立高校がなくなるようなことになれば、府立高校の全体のレベルがものすごく下がってしまうことになる。私立高校との競争に負けないように、府立高校の特色化を図り、学校をしっかりと維持することが大切である。

### (3) 教員の資質向上 (4) 府民の信頼を得る学校運営

- ・ ソーシャルスキルやカウンセリングの充実にあたっては、以前から高校で組織化して運営されてきた既存の体制だけでは対応できなくなっている。府立高校において、新たな組織体制の整備が必要になってきている。

- 情報発信などに対する府民のニーズの高まりもあり、どこの学校も、総務企画部などを分掌の一つに位置づけなければ学校が機能しない状況になってきている。また、分校であれば、学習支援に係る分掌も必要になってきている。学校それぞれで、必要な分掌が異なっているのではないかと。今後、府立高校の特色化が進めば、一層そういうことが生じてくる。

また、特色化の推進と合わせて、学校裁量で様々なことが自由に決められて、予算配分もできるようなシステムも構築していかななくてはならないと思う。
- すでに何校かの高校では、特色化に向けた学校改革が始まっているが、今回の検討会議を受けて、さらに、各高校独自の改革に向けた「本気度」を示す必要がある。

そのためには、改革を推進するための校務分掌が必要である。特に、若い世代の教員がその任を担い、推進力となる必要がある。ただし、特定の教員に負う形の改革は長続きしないので、組織的に取り組むことが大切である。

なお、京都市・乙訓地域の教育制度の見直しなども検討されているところであり、そうした状況も踏まえながら、一定の期限を持って議論する必要がある。
- 学校や学科によってそれぞれ強みや特色、課題がある。独自の課題を解決していくためには、それぞれの学校に応じた組織編成が必要である。

また、そのための予算措置や人員配置のしくみも必要である。現在は、国の標準的な基準によって教員が配当されているが、生徒の多様化への対応など踏まえると、それだけでは回らない。
- 人員や予算の措置については、学校の声を反映してもらいたいと思う。例えば、教員が休日を返上してまで、生徒のために取り組んでいることがなかなか外部には見えていない。学校としては、そうした取組をもっと広報しなければならないが、そのためには、印刷経費など、予算措置が必要である。
- 私立高校との比較の中で、「公立高校だからできない」という理由であきらめてしまっていることもあってはならないか。例えば、府立高校では、生徒証の発行は早くても4月中頃であるが、私立高校では入学式に渡している。「私立高校だからできる」と言われてきたが、「一度やってみよう」と前任校で取り組んだところ、入学式に配れるようになった。入学式の日には生徒証を受け取ることで、当該校の生徒になったという生徒の心構えも違ってくるし、学割が使えるなど生徒の利便性も向上した。また、通学証明書の発行に係る事務の軽減など、学校事務の効率化にもつながった。「公立だから」とあきらめずに、少しの工夫で出来ることについては、どんどん改善していくべきである。

サービス面において私立高校は丁寧だと言われるが、教職員の意識を変えたり、工夫することで私学と同等のサービスができるのではないかと。
- 子どもは、非常にいろいろな顔を持っている。教室ではいい子、休み時間はちょっとふざけた子、部活動ではリーダー的な子、家庭では甘えた顔。そういう子どもの多面性を理解することは、一人の教員だけでは難しい。校内で、チームとして情報を把握し、この生徒にはどういう指導をするのかという指針を立てることが必要なのではないかと。
- 府立高校46校をそれぞれの特色に合わせて「変えてもいい」という認識が学校現場に不足しているように思う。校長をはじめとした管理職に、今回のアクションプ

ランの持つ意味が共通理解されていないのではないかと感じられる。

- ・ 学校改革にあたっては、大胆な発想が必要である。例えば、「アルバイトをする生徒が多くて困る」のであれば、生徒に学校の食堂の運営を任せるくらいの着想などがあってもよい。
- ・ 中学校と高校の連携や高校と大学の共同、高校間の連携について、さらに充実させる必要がある。高校外の専門機関とのコラボレーションも一つの方法である。  
ただし、例えば、大学との共同連携にあたっては、学生ボランティアを単なる労働力として活用するのではなく、win-winの関係性を構築しないと、大学生は動いてくれない。これまでの「学校上位、学生下位」の価値観のパラダイムを変える必要がある。
- ・ 「どこから切っても同じ金太郎飴」のような府立高校の在り方を根本から見直し、高校が向かいたい方向性がクリアに見えるような大胆な改革が求められている。今後、各校が特色を打ち出す際に、特色が判で押したように、「学力向上に向けた取組が必要」などの文言が並ばないようなアクションプランにすることが大切である。

#### (5) 部活動の充実

- ・ トップチームを作っていく一つの手立てとして、現在、京都府では小学校4年生から育成を図る「ダイヤモンドプロジェクト」を行っている。  
また、学校における拡がりを作っていく取組としては、各高校が得意とする競技について、小学生や中学生を対象にしたスポーツ教室を開催し、愛好者の拡がりを促しながら、中高の部活動の連携を通じて、育成を図っているところである。  
課題としては、そうした心意気のある指導者がいるかどうかということや、オープンに使える活動場所があるかどうかなどがあげられる。また、トップ層の育成となれば、個人にかかるストレスも強いので、栄養面・心理面・理学面など幅広いサポート体制がないと、日本や世界で活躍できる人材育成にはつながらない。
- ・ 本校では、専門学科生徒の地域振興に役に立つ意識を刺激するために、様々な体験活動をさせている。現任校への着任時、高校生活の送り方に「あまい・ゆるい・よわい、結果として危ない面がある」との印象を持った。他の公立高校にもそういう傾向があると感じる。本校でも、例えば、専門学科の生徒に地域に役立つ意識啓発のために、様々な体験活動もさせているが、そもそも学校は厳しいところであり、ルールを守る、勉強することが基本にあるということは譲れない。その上で、人に親切にする、嘘をつかないといったモラル意識を徹底することが、安心感のある学びの場としての環境を整え、様々な活動ができる場となると考える。
- ・ トップチームを作る、トッププレイヤーを育成するためには、府立高校の指導体制にも差別化が必要である。また、いろいろなスタッフを気軽に活用できるような体制も必要である。教員だけで対応することは難しい。近畿大会や全国大会をねらうレベルでもプレッシャーはかなり大きい。トレーナーやドクター、スポーツ心理の専門家などによるサポート体制の整備などの施策が必要である。
- ・ 私の子どもは、中学校時代からスポーツライミングをしており、高校進学後も部活動ではなく個人の活動として続けているが、全国大会に出場する際、在籍校の校長に出場の承認をお願いしたのだが、「部活動ではないので、責任が持てない」

として承認してもらえなかった。私立高校であればもっと柔軟な対応をしてもらえたのではないかと残念であった。新たな部活動を成立させるためには、選手の確保や目標設定も必要となる。競技人口の少ない競技についても大切にしてほしい。また、部活動としてではなく、個人レベルで全国大会に出場する場合などについても、生徒の活動として支援してもらいたい。

- ・ 中丹地域において高校生の文化祭典を実施しているが、参観者は関係の生徒や保護者のみで、非常に少なかった。高校生の活躍を知ってもらえる良い機会であるのに、府立学校だけの閉鎖的な活動となっているのはもったいないため、小学校や中学校と一緒にできないかという意見があった。そこで、中丹広域振興局や中丹教育局が中心となって実施されている由良川元気サミットとの連携が実現したところである。その結果、一般の方もたくさん参観してくれるようになり、小・中・高が相互に発表をみる機会も設けることができた。ただ、施設面や地理的な面で課題もあり、まだまだ十分とはいえない。予算の伴うことではあるが、例えば、綾部で実施した場合に、福知山や舞鶴から交通の便をどう確保するかなどについても今後考えていかなければならない。

#### (6) 土曜日の活用

- ・ 現状で、土曜日・日曜日にも多くのクラブが活動を行っている。また、最近の子どもたちは、自分の家で勉強する子が少なく、自習をするために学校に来る生徒もいる。学校の自習室を開放しているが、管理については教員の熱意やボランティアで対応しているのが現状であり、課題である。土曜日・日曜日も平日と同じように戸締まりをする作業員を手配してほしい。

#### (7) 多様な人間力の育成

- ・ 本年度から府において事業化されたグローバル人材育成のための海外留学制度についてだが、短期留学に比べて、長期留学への希望者が多かった。短期留学についても、大変良かったとの声も聞く。非常に良い取組であり、希望する生徒が多かったことも踏まえ、学校現場からは、もっと多くの生徒が行けるようにしてほしいとの声があがっている。
- ・ 毎年京都府スポーツ少年団が実施している「日独同時交流事業」を今年、長岡京市が受け入れ、本校の専門学科の生徒もその取組プログラムの一つに参加して、ドイツの少年団と交流をしたのだが、人とのつながりができ、また、異国との文化の違いを体感できたとして、「ぜひドイツに行きたい」という夢や目標を生徒が持ったようである。
- ・ 日本ではコミュニケーションが苦手な生徒や場の雰囲気が読めない生徒が、海外に留学し、海外の人と接する中で、「自分はこれでいいのだ」という自己肯定感を持って帰ってくる人が多い。語学力を磨くという技術的な面での海外交流だけではなく、日本の文化と異なる環境で自分の可能性をつかむことを目的としてもよいと思うので、希望すれば誰にでも留学できるチャンスがあると良い。

#### (8) 発信力・広報力の強化

- ・ ほぼ100%の中学生が高校進学を希望している昨今の状況において、当初は公立高校を志望する生徒が非常に多い。しかし、自分の成績など、様々なことを考えていく中で、私立高校も検討材料に入れ、私立高校のオープンキャンパスや学校説明

会で、施設面も含めたPRを聞く中で、この私立高校なら頑張れるのではないかと感じる生徒が増えていく。

- 最近、私立高校の中でも人気が上がってきているのは、いわゆる大学の併設高校で、高校に入学すれば大学進学が保証されるので、人気が非常に高い。高校側も、大学進学まできちんと面倒を見るということをかなりPRしている。公立高校ではそこまでなかなか言いにくいのではないかと。
- 高校に送り出した生徒の中で一番心配するのは、ぎりぎり公立高校に合格した生徒である。その生徒が、本当に3年間高校生活を続けていけるのか、高校を卒業して自分の進路を決めていけるのかということが心配である。  
噂ではあるが、公立高校の中には1年間に1クラス分ぐらいの留年者を出すような高校もあるように聞く。保護者も様々な所でそのような噂を聞きつけて、公立高校から私立高校へ志願を変更されることもある。
- 一人一人の卒業生について、この子はこんなふうに学力が伸びている、こんな課題を抱えているなどの高校から中学校への情報提供については、私立高校の方が丁寧である。
- この夏休みに、公立高校の中にも情報提供に来てくれた学校もあるが、私立高校は、高校1年生だけではなく、在学しているすべての生徒について、卒業した中学校に情報を持ってきてくれる。さらに、高校卒業後の進路先についても提供してくれる。そういう点は、公立高校においても努力してもらいたい。
- 学校によって様々であるが、多くの私立高校には、入試担当の部署がある。また、広報活動や中学校との連携のために、専門の職員を置いている私立高校も多い。そうしたところで、公立高校とは大きな差があるように思う
- 中学生は様々な高校に進学していくが、中学校と公立高校との連絡会議が形式的であったり、短時間であったり、時には行われなかったりすることもある。しかも、連絡会議の内容が、きちんと学年団等に伝わっていないのではないかとと思われるケースもある。高校に入学して間もない時期は、子どもたちにとって、期待もある反面、様々な点で不安や悩みも多いと思うし、高校の先生方も生徒の状況がつかみきれていない場合もあるのではないかと。入学時には、中高それぞれ忙しい時期ではあるが、内容的に丁寧な中高連携が必要ではないか。そういった意味において、高校側に中高連携の専属の部署があると良い。  
中高の一般の教職員が、生徒の状況などについて話す機会があまりない。入試時期に教務担当や管理職同士が話をすることはあるが、これだけ様々な課題を持つ生徒たちがいる状況においては、できるだけ連携を密にすることが望ましい。  
例えば、4月当初から5月までの早い時期に、そうした機会を持ってもらえると、中学校側で把握している状況や配慮の必要な点などを伝えることができ、早期に生徒理解や指導に役立ててもらえることもできるのではないかと。
- 中高の教員間では、どうしても部活動や何かの関わりによる個人的なつながりなどに依拠するケースが多いように感じる。円滑な中高連携ということを考えれば、やはり中高連携のための部署が分掌上に位置づけられ、個々の教員間の連携でなく、組織としてチームとチームとが連携できれば、中学校を卒業した生徒も安心できる

し、保護者の不安も解消できる。高校にそういう部署があれば、非常にありがたい。

管理職同士でまず連絡を取り合ってから担当教員につなぐなど、現状では手続的な面でかなり身動きの取りにくいケースもある。もう少し動きやすい形で、しかも組織として中高連携ができれば、中学校も安心であり、高校もある程度の情報を持った上で指導をしていただけるのではないかと思う。また、入学時などだけではなく、高校と中学校が日常的にコミュニケーションできることが望ましい。

- ・ 中高連携における公立高校の窓口が明確でない。高校によっては、教務部や総務企画部であったり、専門学科については直接学科の担当であったり、各学校ごとに個別の対応が必要になるので、連携したり、連絡する際に困ることが多い。入試関係や中高連携関係の窓口がより明確であれば、もっと連携しやすい。

例えば、私立高校であれば、担当の先生が明確にいらっしゃるので、その先生に言えばすべてのことに通じている。

- ・ 各教科においても、高校の教員が指導する中で、「中学校の時にこのような点に力を入れて指導しておいてもらいたい」などといった教科の専門性に係る内容についても連携できると、学力の充実向上にもつながるのではないかと思う。

#### (9) 各校独自の施設設備の整備

- ・ 公立高校との違いとして一番言われることは、私立高校は設備がきれいだということである。保護者にとって、入学させて安心であるということは大きな要素である。子どもたちにとっても、教育環境が与える心理的なモチベーション、安心感は非常に大切なことである。ピカピカの最新設備ということではなく、非常に手の入れられた気持ちのいい学習環境であることが大切である。

以前に勤務していた学校は非常に荒れていたのだが、生徒たちを立ち直らせる一つの視点に学習環境の整備を置き、校舎の中に死角があったり、手の入れられていない所があったり、壊れたものが放置してあったり、掃除をせずにはこりが舞っているというような所を改善したことで、生徒たちの気持ちがずいぶん変わった。環境や佇まいを大事にして、補修したり、手を入れたりして、自分たちが大切にしてもらっている、環境を整えてもらっているという意識を持たせることが大切である。

また、ソフトに関しても同様で、保護者に対して、生徒に関することを早めに伝えたり、資料を渡したりして、大事にしてもらっていると思われることが、保護者の安心感や先生に聞けば何でも教えてもらえるという関係の強化につながる。

- ・ 先日、宇治市で集中豪雨による被害事象が生じたが、ちょうどお盆休み中であつたため、復旧に向けて人や重機が集まらないという状況であった。突発的な災害によって電車が止まった時に、生徒が帰宅難民になったらどうするのかなど、非常時の対策について、PTAも学校も十分に考えられていないのではないかと改めて思った。保護者にとって、子どもの安全が一番大切である。例えば、学校で寝泊まりすることになった場合の寝具の準備や食料などの備蓄をどうしておくのかということについても考えなければならない。